

普通江改修工事の歴史的意義 —植民地期との連続と断絶をめぐって—

谷川竜一

平壤の普通江改修工事といえば、一般的には金日成らが主導した1946年5月の普通江改修工事を指す。しかし実はそれは日本植民地期において始まったものだ。工事は複数の部分工事から成っており、そのうち①新水路建設による普通江付替工事、②旧河道の運河化工事の二つが1945年の解放後まで残されていた。金日成を始めとする朝鮮人指導者らは、この工事を「継承」し、完成させたのである。

本稿では、新資料である『普通江 改修工事特輯』を用い、それに植民地期の資料をつき合わせながら、解放後の工事が植民地期のそれといかに連続し、どのように断絶していたのかということ考察した。普通江改修工事を構成する各工事の連続の様子、工事が実施された地域の景観や特質、そして解放後において工事が完成していく過程など、多くの具体的な事実も同時に整理・解明した。そこからわかったことは、工事は物理空間としては日本植民地期の計画が具現化していったものだったが、抽象的な意味や意義においては朝鮮人たちのナショナリズムが強く投影されたことだ。解放後の朝鮮人指導者らは、こうした連続と断絶をうまく編集しながら工事を成功させ、その過程を通じて平壤の都市防水や経済開発という実利のみならず、それ以上の成果を得ていったのであった。

1 はじめに

1.1 都市の周縁としての普通江

1945年8月15日の正午、日本は戦争に敗れた。すると「午後には早くも平壤の西郊外の部落民を魁に、太極旗の氾濫の中に万才のデモ行進が始まり、平壤府内から道内全般に拡がっていった」¹⁾。茫然自失する多くの日本人たちを尻目に、万歳を唱和して行進する朝鮮人たち。植民地・朝鮮で、帝国日本の崩壊が始まったのである。それはすなわち、朝鮮人たちにとっては1910年より続いた長い支配の終焉とそこからの解放を意味していた。

上記「 」部分で記した引用は平壤の警察幹部の回想であるが²⁾、当時の西郊外には城壁に沿って「土城廊（トソンラン）」と呼ばれる平壤最大の貧民街があった。「西郊外の部落民」のなかにはその地の貧民たちが多く含まれていたと思われる。そして土城廊

のすぐ傍を流れる普通江は、頻繁に氾濫する河川として知られており、作家・金史良が短編「土城廊」で活写したように、貧民たちは大雨のたびにその洪水におびえて暮らさねばならなかった。

しかしながら普通江自体が歴史的に重要な河川だったかという点、そうではない。むしろ、平壤を流れる河川と言え、普通江よりも大同江の方がよく知られているし、実際のところ河川改修工事でも大同江の方が早い段階で始まった。大同江沿いには、市内中心部を中心に1926年から10ヶ年の計画で平壤中心部の防水を目的として堤防が築かれたし（実質的な工事は1930年から始まった）、舟運のための運河も改修工事の一貫として建設されてきた。植民地期の平壤の河川改修工事史では全てにおいて大同江が先行していたのだ。

しかし、普通江の洪水対策がおざなりだったからといって、その地に関心が払われなかったわけではない³⁾。むしろ大同江沿岸の開発可能な場所が工場などで埋められていくにしたがい、平坦な低地が続く普通江沿いは、都市中心部に直結する「未利用地」の一つとして注目を集め始めた。暴れる普通江を別の場所に付け替えてしまえば、旧河道周辺は工業発展が見込まれる有望な場所となる——そんな経済合理主義的な思考の下で、1930年代になると開発圧力がますます高まり、改修工事が下流から進み始めたのだ。そして工業化する平壤に惹きつけられてやってきた人々なかでも特に貧しい人々が集住を始めた。こうして洪水と貧民が折り重なる場所となった普通江は、平壤の都市域が切れるいわば空間的・社会的周縁性を背負う地となっていくのである。工事は敗戦まで続いたが、それでも日本は完成させることはできず、普通江沿岸のそうした場所性は解放後まで残されることとなった。

そして1946年、新しい指導者である金日成らが普通江の改修工事に大々的に乗り出した。彼らは工事を建国事業として位置付け、平壤の都市民たちを大がかりに動員して普通江の付け替えに挑み、成功させたのだ。この後、朝鮮戦争からの復興が始まると、普通江の旧河道周辺は飛躍的に発展を遂げていくこととなった。都市の災害や格差などのひずみを抱え込んだ周縁の場所は、その内部へと呑み込まれていったと言えよう。

1.2 本研究の目的

解放後の1946年5月の普通江改修工事が、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の建国に際して、極めて重要な工事となったことはこれまでも指摘されてきた。とりわけ、金日成ら新しい指導者側が工事を通じて動員の仕組みを整えていくとともに、国民

意識を人々の間に植え付けていくことに成功していった点が注目されてきたわけだが、しかしながら工事がなぜそのような機能を果たし得たのかという点について、多角的かつ具体的な考究がなされてきたわけではない。

これに対して筆者は、数年前に工事記録をまとめた『普通江 改修工事特輯』（以下、『普通江』）を発見し⁴⁾、それをもとに2023年春に論考（以下、前稿）をまとめた。そのなかで示したのは、この工事が植民地期においてかなりの程度進んでいたことや、それを1945年の解放以後に登場する新しい指導者たちが継承・連続していったことだ⁵⁾。特に重要なことは、そこでなされた興味深い工夫である。北朝鮮共産党が率先して工事に導入した「突撃」と呼ばれる集団的かつ演劇的な労働形式などはその最たるもので、これを通じて工事には国家のための自己犠牲と連帯、競争という物語がわかりやすく持ち込まれた。こうしたことが影響した結果、労働現場の雰囲気に変化しはじめ、工事も予定期間を繰り上げて竣工することに繋がっていくのである。解放後の朝鮮の指導者たちは、「突撃」に象徴されるような工夫や仕掛けを通じて、植民地期において日本人が始めた地方の一河川改修工事を、朝鮮人の建国事業へと脱皮させていったのであった。

本稿では、こうした議論にまた異なる角度からアプローチする。具体的には、普通江改修工事が上記のような国家的統合や象徴の力を持ち得た理由を、河川の付替工事という土木工学的な技法との関係のなかで整理してみたい。それと同時に、前稿で踏み込まなかった普通江周辺の地域特性や、改修工事後にその地域がいかなる空間となっていたのか、ということもまた考察する。こうした作業を通じて、朝鮮人たちが実践した工事内での工夫や仕掛けの機序解明にとどまらず、それらが有効に機能し得た背景や理由を、工事全体の構成や枠組みの下で明らかにしたい。最終的には、河川の付け替えという工学技法と朝鮮人指導者たちの創意が、合理的に関連し合っていたからこそ国家的統合や象徴の力が生まれたということが、前稿よりもさらに具体的かつ構造的に見えてくるはずだ。

なお、普通江改修工事を都市空間的な側面から考察した研究は、先にあげた筆者や韓国のキム・テユンの研究、および北朝鮮のキム・ギョンスの研究などがあげられる⁶⁾。いずれの研究も普通江改修工事が北朝鮮の建国事業の一環として非常に重要だったことを共通に指摘しているが、河川の改修や付替工事という土木工学技法がそうした象徴性といかに関わっていたのかという点を深く検討しているわけではない。他方で、植民地期の朝鮮における河川改修に関しては、広瀬貞三による一連の研究があげられる。技術

者や工事空間にまで目を配り、地域社会を重視しながら、土木工学が果たした意味を朝鮮全体で明らかにしようと試みた広瀬の取り組みは重要だが、普通江に着目しての研究は行っていない⁷⁾。こうした先行研究に支えられながら、本稿ではもう一歩先に歩みを進めてみたいと考えている。

2 植民地期の普通江改修工事

2.1 普通江改修工事の構成

最初に、普通江改修工事が植民地期においていかなる変遷を辿ったのかというアウトラインを示しておこう。前稿において筆者は、普通江の改修が1920年代末の朝鮮総督府の都市計画案にすでに含まれていたことを明らかにした。先に整理しておくとして、そこで示された普通江改修工事は、以下の三つの枠組みに分節化されて進められることとなった。

- ① 新水路を建設して普通江を付け替えることで平壤西側の防水を達成する。
- ② 旧河道を運河化して付近の工業経済的価値を高める。
- ③ 大同江との合流地点には遊水池兼船溜まりを設けることで防水に加えて「水運の便を得て工業地として一層価値を増大」させる⁸⁾。

なお、これら分節化された三つの工事は、第二次世界大戦や解放、朝鮮戦争などの大きな時代の転換に関係なくその枠組みが連続した。したがって本稿では、論文全体を通じて同一のナンバリングとし、①新水路建設、②旧河道の運河化、③遊水池兼船溜り建設として扱うこととする。

このように分節化されて普通江の改修が進められたことは、つまるところ植民地期に立案された工事全体の目的が、都市防水と経済開発を両立させ、平壤の工業化を促そうとするものであったことをよく示唆していよう。そしてこうした目的は平壤特有の地域事情を背景としていた。それは平壤の東・南側を流れる大川・大同江の沿岸に、莫大な埋蔵量の、そして良質の無煙炭の炭田が広がっていたことだ⁹⁾。特に平壤から8kmほど大同江を遡ったところには、この地域最大の産出量を誇る海軍燃料廠の寺洞炭鉱があった。寺洞をはじめとする平壤近郊の炭鉱の成長は著しく、1918年頃までは年産20～25万トンで推移していたが、1928年には倍近い38万トンに達している¹⁰⁾。平壤はこの

石炭で著しい成長を遂げていたのであり、大同江だけでなく普通江もその輸送や活用を担う河川として位置付けられていたのである¹¹⁾。だからこそ、①新水路建設による河川の付け替えで都市防水を達成しつつ、②旧河道の運河化により周辺を工場地域化し、③船溜まりなどの大同江との連絡航運施設を設けて経済開発に資することが目論まれたのである。

これら①～③の工事を一括して行うにはもちろん規模が大きすぎたので、それぞれの工事はその時々異なる予算計画のなかに繰り込まれながら、別々に事業化されて実施されていった。

ここからその工事を順次見ていくと、最初に始まったのが③の工事である。正式には「大同江普通江合流点附近改修工事」という。総督府が主導した「朝鮮窮民救済治水工事」の一事業として位置付けられ、1934年から総工費70万円、2ヶ年事業で進められた(図1¹²⁾)。担当したのは朝鮮総督府内務局土木課の平壤土木出張所である。

この工事について、総督府は次のように述べている。

(谷川注：普通江の下流部は)平壤府の発展に伴ひ将来市街地たるべき素地を有するも、流路の屈曲著しく水流を阻害する為年々洪水による被害甚大なるものあり。依て最も急施を要する下流部平壤府外六・五方秆の地域を総工費七〇〇,〇〇〇円を以て完全に水害より防御し、併せて築堤土掘鑿跡地を利用し、閘門一基を設けて

図1 「大同江普通江合流点附近改修工事平面図」(1936年度末現在)



(図左下に普通江と大同江の合流地点を拡大。一部谷川が書き加えた。出典は注12参照)

船溜となし、大同江水運を利用する貨物の吞吐に備へんとするものなり¹³⁾。

要するに普通江下流部に堤防を造って6.5km²に及ぶ地域の防水を進めると同時に、運河や船溜まり建設を通じて水運の利便性を高め、最終的には普通江沿岸の工場地域化を促進させようとするもので、これは先に見た当初の計画目的に沿ったものであった。この工事は、最終的にやや縮小されたものの、それぞれ延長875m、広さ23haの規模で1937年に実現した¹⁴⁾。

2.2 「中小河川改修工事」としての普通江改修工事 ①

こうして1930年代半ばから動き始めた普通江の改修は、氾濫原一帯に対する民間の開発欲を刺激したが、実際にその地が工場地域となるには、①新水路建設によって普通江の流路変更をすることが欠かせなかったし、②旧河道も運河化する必要があった¹⁵⁾。実際、③の合流地点の遊水池兼船溜まりの工事が終わった後も、普通江は頻繁に洪水を起こしており、ほぼ毎年周辺の家屋が浸水する有様であった¹⁶⁾。

このような中小河川による被害は、実は朝鮮全体の問題として、1930年代半ばに強く意識されていったようだ。なかでも1936年7月の洪水は大きなインパクトを与えた。

昭和11年7月南鮮中部以南に稀有の豪雨に依る大洪水あり。仍て治水調査委員会を設置し治水の根本策を調査検討したる結果、中小河川の急務なるを認め、即ち昭和12年度より5ヶ年継続の国庫補助事業による中小河川235河川の改修(中略)を実施するに至れり¹⁷⁾。

大河川の改修工事が進展すると、そこにおける洪水を逡減することになるかもしれないが、予期しないしわ寄せが中小河川にも及びうる¹⁸⁾。こうして1937年から「中小河川改修工事」の一環として¹⁹⁾、総工費410万円を用いて普通江の改修工事が始まった²⁰⁾。数年前に竣工した平壤府庁舎の建設費が20万円だったことを踏まえれば、かなり大きな額だったと言える。担当は、③の工事同様に、朝鮮総督府内務局土木課の平壤土木出張所だったようだ²¹⁾。具体的な工事構成がわかる資料がないが、1938年の平壤の「平壤市街地計画平面図」には、残された工事である①新水路建設を通じた普通江の流路変更と、②旧河道の運河化がはっきりと含み込まれていた(図2²²⁾)。

このうち①の新水路建設の位置については、1928年末に計画された場所よりも西に

図2 「平壤市街地計画平面図」に記された新水路と運河化計画（1938年）



(普通江新水路は太白実線、運河化予定の旧河道は黒細点線にして谷川が強調した。鉄道路線も上からなぞりなした。出典は注22参照)

1.5kmほどずれ²³⁾、鳳岫里を抜けるルートが設定されていた²⁴⁾。移動は京義線の路線計画と重複したことが原因だが、1939年1月に普通江の付替許可が平壤府から出た後は²⁵⁾、敗戦までルートは変わらなかった²⁶⁾。堤防は高さ5m、延長11km、水路の幅は215mの計画で進められたようだ²⁷⁾。

結論から先に言えば、前稿における筆者の分析や²⁸⁾、解放後の普通江改修工事の記録からもわかるように²⁹⁾、①新水路建設は7割ほどの完成度で敗戦を迎えた。特に鳳岫里を走る平南線のすぐ南側まで工事が進んだが、それより北側の上流部分の新水路建設に関しては、植民地期においてはほとんど手つかずで、この部分が残りの3割だったと考

えざるを得ない。具体的には、北西から流れてきた普通江を、南向きの新水路と、東向きの運河に分岐する部分の工事であり、それらが解放後に持ち越されることとなった。

2.3 旧河道の運河化(②)——工場地帯と「土城廊」

それでは、②の運河化工事はどうなったのだろうか。ここでその工事に加えて、同時に進められた二つの都市開発事業に触れておきたい。すでに韓国のキム・テユンがこれらの事業を考察しているので、そこに新たな情報を補足しつつ、普通江改修工事との関係を再考する。

一つ目は中小工場向けの「平壤府堂上里工業用地造成工事」(以下、この場所を「堂上里工業地域」とする)である(図3³⁰)。これは平壤府が、普通江の①新水路建設や②旧河道の運河化を待ちきれずに、1940年以降694万円の予算をつけて3ヶ年計画で始めたものだ。全体の敷地は、平壤西側の堂上里や一部大馳嶺里を含む地域で、面積は61万坪もあった。計画で目を引くのは水・陸の運輸施設の充実ぶりだ。特に、普通江改修工事で完成されるはずの旧河道を利用した運河は計画の中心に据えられており、非常に重要な役割を果たしていた。

具体的には、幅50~100m、深さ2.5~3.1mの運河が造られる予定で、その両岸には適宜荷揚場を準備するとともに、幅25mの小運河を掘り込むものだった。「中小河川改修工事」でつけられた予算とは別に、この工業用地造成工事につけられた予算で運河を開鑿しようとした可能性が高い。しかも各運河には平行して鉄道を敷設し、道路網や排水門、排水路施設なども合理的に配置するという³¹。つまり普通江改修工事と融合した事業であり、一言で評価するならば、工場誘致のために運河や水路を最大限利用した手厚い工業用地造成計画だったと言ってよいだろう。

そもそもこうした計画が出て来た背景には、少なくとも1920年代から——先に述べたような石炭の産出が急上昇していた時期である——、平壤が工業都市として発展することが当然視されていたことがあげられる³²。さらに、続く戦時工業化のなかで、普通江沿岸の開発は「中小工業地区トシテ唯一ノ場所ニシテ此等企业ノ促進及誘致上絶好ノ事業」と目されてもいた³³。平壤府はこうした期待を受けて企業者から土地代の前納金を集め、それを元手に工事を始めるなど、かなり前のめりで開発を進めていた³⁴。しかし、肝心の①新水路建設の遅延および戦時の統制の影響などにより³⁵、工事費用は前納金を甚だしく超過してしまったという³⁶。投機的な開発を進めていた平壤府は、付替工事自体の遅延によって足元を掬われてしまったのだ。「監督ヲ怠リタル」として、平安

図3 「平壤府堂上里工業用地造成工事」(1940年～)



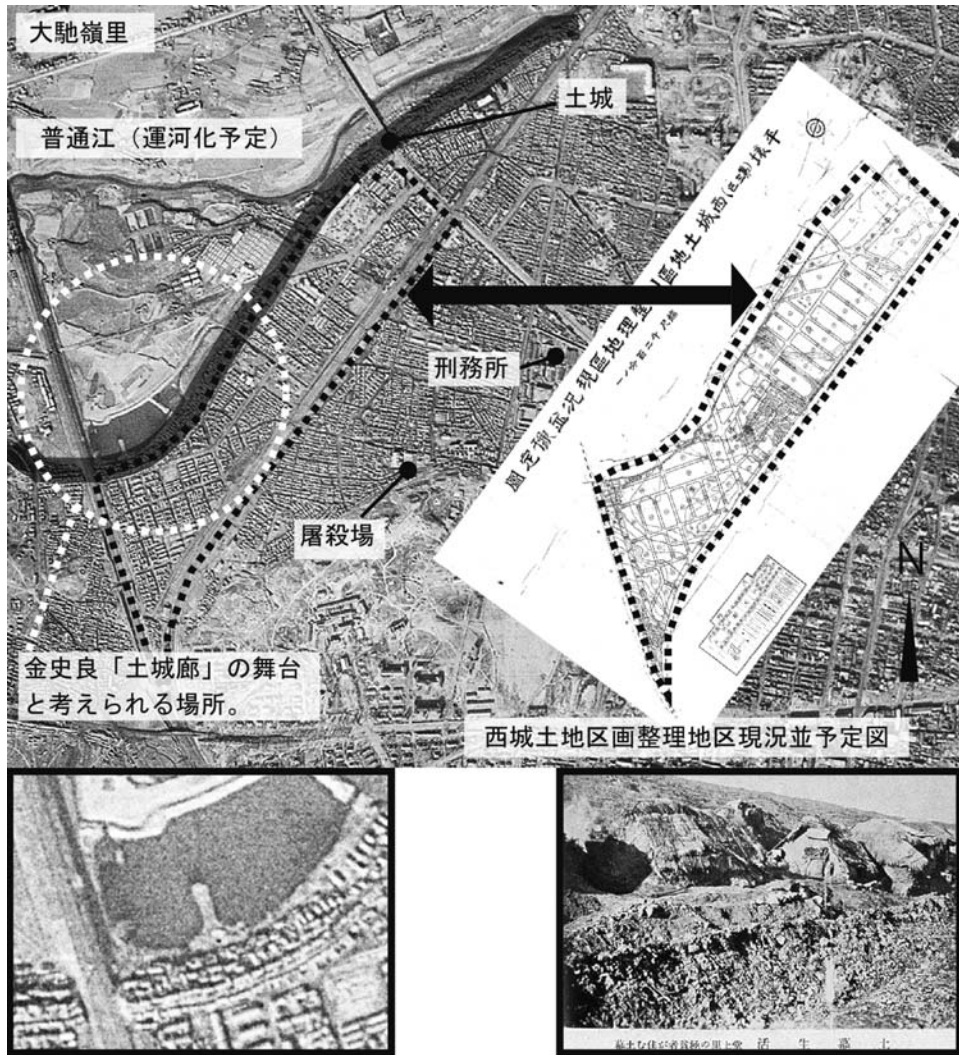
(平南線や鉄道引込予定線は上からはっきりわかるように谷川が線を引きなおした。普通江の新水路や運河、堤防もトーンをかけて塗り潰した。出典は注30参照)

南道知事は朝鮮総督府内務局長から強く叱責を受けたが³⁷⁾、結局この「工場用地造成工事」の核となる運河建設は、その後ほとんど進展しないまま敗戦を迎えたようだ。

二つ目の都市開発事業として取り上げたいのは、普通江沿岸の一地域である西城里に対してなされた土地区画整理事業である(図4³⁸⁾)。これは1937年以降、平壤で市街地計画事業として施行された三つの比較的規模の大きな土地区画整理事業の一つであり、府はそれによって西城里が「理想ノ住居地並ニ商業地」となることを目指していた³⁹⁾。

こうした事業を始めた理由は、平壤の工業化にともなう普通江周辺の急激な人口増加

図4 西城里附近概要図



(1950年の米軍航空写真に、1939年の西城土地区画整理地区現況並予定図を付した。黒点線部分が西城里の土地区画整理地域となる。白点線の円は金史良「土城廊」の舞台と思われる場所。左下は米軍航空写真に写り込んだ土城廊の一部を拡大した。拡大写真内の北側の水たまりは、普通江の旧河道が沼地となったものと考えられる。右下写真は貧民たちの住まいである土幕。谷川作成。各出典は注38参照)

があったからだと思われる。なかでも西城里は、1930年代半ばに急成長を始め、1935年には人口2万3000人を抱える「平壤最大の町里」として稠密化の途上にあつた⁴⁰⁾。こうした現状から、平壤府は土地区画整理事業によって西城里を秩序ある宅地へと変化させようとしたのだろう。またキム・テユンによると、この事業は先に述べた「平壤府堂上里工業用地造成工事」ともセットで考えられており、そこに出現するはずの中小工

表1 平壤の「下層民」の分布地域と各人数

平壤府の「下層民」									
地域	包含地域	合計	勤労者	非勤労者	地域	包含地域	合計	勤労者	非勤労者
大同江東岸流域方面	船橋里	42	41	1	中央部方面	真香里	2	1	1
	東大院里	19	18	1		上水口里	7	1	6
	新里	29	25	4		下水口里	1	0	1
	綾羅島	8	7	1		鏡齋里	6	2	4
南部方面	若松町	1	1	0		倉田里	6	3	3
	橋口町	21	16	5		新倉里	5	1	4
	柳町	11	11	0		上需里	25	3	22
	八千代町	2	1	1		磚九里	1	0	1
	南町	4	3	1		将別里	1	0	1
	幸町	2	1	1		巡営里	1	0	1
	東町	7	6	1	寿町	3	0	3	
	黄金町	1	1	0	北部方面	景昌里	1	1	
西部方面	西城里	151	99	52		仁興里	35	31	4
	岩町	1	0	1		箕林里	75	70	5
	新陽里	15	13	2		慶上里	19	0	19
	堂上里	34	29	5	府の近郊	寺洞	5	5	0
	陸路里	4	0	4		平川里	2	1	1
漂泊不定居 府内近郊一帯	13	0	13	新里の一部		9	9	0	

(この調査はどこまで包括性をもってなされたのかがはっきりしない。恣意的に一部地域を選んで行ったとは考えられず、かなり客観的な状況を示すことは間違いないと考えられる。谷川が整理しなおした。各出典は注42参照)

場で働く労働者たちの居住地としても想定されていたようだ⁴¹⁾。

ただし、西城里の事業の動機が、人口の急増や工業化への対応だけだったとは思えない。というのも、1933年8月に平壤府が行った「下層階級に於ける生活及思想状態調査」によれば、実のところ西城里にはずば抜けて多くの貧民が——それも「最下層」の人々が——住んでいたからだ。その理由は、この地域に平壤最大の貧民街である土城廓が広がってことによる(表1⁴²⁾)。

金史良の短編小説「土城廓」では、物語の舞台として屠殺場や監獄、線路などが繰り返し描かれる⁴³⁾。それらはいずれも西城里かそのすぐ傍にあったものだ⁴⁴⁾。また、物語中では土と藁で造った貧弱な住居である「土幕」が、平壤の城壁である土城に向かう斜面に広がっていたとされている。正確な位置同定が難しいが、主人公の住まい近くから

東側に、湿地や屠殺場、さらにその向こうには監獄が見えるという記述があるので⁴⁵⁾、舞台となった土城廊は西城里のなかでも平南線と京義線の分岐路をやや北側に入ったあたりの一帯と判断できよう⁴⁶⁾。しかもこの付近は、他にも伝染病の隔離病院や墓地などがあり、さらに戦時期には下水処理場の建設が進められた。要するにここは冒頭で述べたような、都市のいわゆる「迷惑施設」が集まる周縁の場所だったわけだ。

若干ここで補足しておくところとした貧民街は、例えば普通江西岸の堂上里など、平壤周辺のかなり広い地域に点在していたのは事実だが⁴⁷⁾、特に都市城壁である土城に連なって分布する傾向があったようだ。例えば、先にあげた「下層階級に於ける生活及思想状態調査」において西城里に次いで貧民が多いのは箕林里だが、ここもまた当時城壁があった地域だ。加えて、明治末にやってきた日本人たちの記録では⁴⁸⁾、後年に日本人街の主要な通りの一つとなる瑞気山通りの場所には、もともと平壤中城と外城を分ける土城があり、そのすぐ外に貧民たちが土幕を構えていたという記録がある⁴⁹⁾。さらに、1950年秋に米軍が撮影した平壤の航空写真にも土城に沿って細かい不整形な住宅が密集していることがわかる。このことから貧民街としての土城廊はまさしく読んで字の如く「土城」と「廊」、つまり土城とともに長く伸びる帯状の土幕地帯だったと考えられるが、西城里はそのなかでもずば抜けて多くの貧民を抱える地域だったのだ。

この西城里について1950年の航空写真を見ると、都市型韓屋と呼ばれる植民地期に朝鮮全土でさかんに建てられた住宅が、規則正しく計画的な形で出来上がっていた(図4参照)。このことから、第二次大戦の戦時下であっても土地区画整理事業に沿ってかなりの程度宅地開発が進んだと考えられるが、他方で土城廊は消えずに住宅地の周辺に残されており、貧民街もまた解放後まで継続していたと判断できよう。

2.4 小括

以上、植民地期までの普通江改修工事をまとめれば、それは都市防水と経済開発という二つの目的を掛け合わせて、平壤を工業化していくための方策の一つであった。工事は①新水路建設、②旧河道の運河化、③遊水池兼船溜まりの建設という三つのパートからなっており、それらは様々な予算の枠組みを用いて進められたが、植民地期に完成したのは③だけであった。①新水路建設は7割ほどの建設で中断してしまったし、普通江沿岸の工場用地造成事業と連動した②運河化工事にいたっては、ごく一部しか完成できなかった。しかしそんな工事の停滞を尻目に、周辺地域には多くの人々が流入しつつあり、なかでも西城里などは金史良が「土城廊」で描き出したように、都市の「最底辺」

の労働を担う貧民たちが爆発的に増加していた。いわば普通江沿岸は、開発圧力がはっきりと現れる都市の周縁であるとともに拡大の最前線を担っていたのである。そうした場所を、日本人たちは開発しきることができずに植民地支配を終えたのであり、結局のところ普通江沿岸が抱える問題は、そうした場所性まで含めて解放後へと残されたのであった。

3 解放後の普通江改修工事と植民地期の計画の「継承」

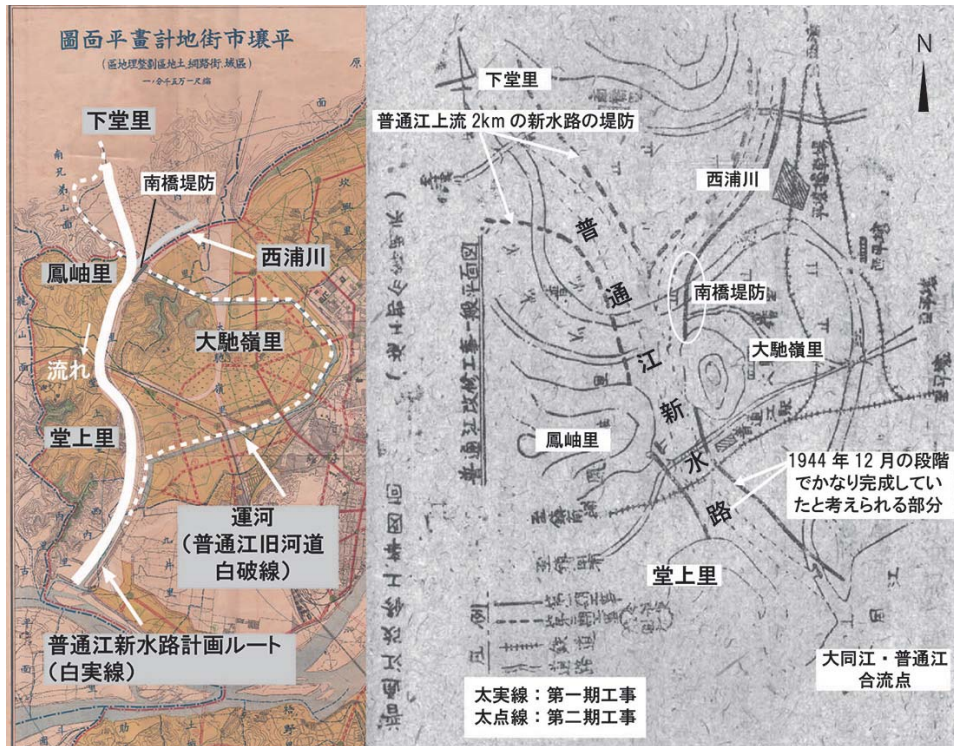
3.1 解放後の普通江改修工事の目的と第一期工事

次に、1945年8月の解放以後に目を移そう。工事記録をまとめた『普通江』によると、解放後の普通江改修工事は二期にわけて進められたことが示されている。第一期工事が1945年11月から翌年6月末まで⁵⁰⁾、そして第二期工事が1946年5月から7月末までと計画されていた⁵¹⁾。筆者が前稿で示したように、これらの計画内に示された物理的な構成——新水路の位置や堤防の大きさなどは植民地期のそれとほとんど同じであり、解放後も工事の内容は連続していたと言ってよい。

第一期工事から見ていくと、それは「今年度防水の応急的な左岸築堤一切と掘鑿工事」であった⁵²⁾。『普通江』に付された図を見てみると(図5⁵³⁾。なお位置を分かりやすくするために植民地期の都市計画図を左に付した)、図5の右図内太実線が第一期工事の場所を示している。前稿で論じたように、鳳岫里以南の工事は解放前にかかなりの程度完成していたはずなので、第一期工事の内容は、その残工事と西浦川の左岸堤防、および旧河道を区切って新水路に水を向かわせる堤防——後述するように南橋堤防と呼ばれた——だったと考えられる。このうち普通江の支流をなす小河川・西浦川は、1939年に鉄道の操車場建設にともなって付近に付け替えられたもので、解放後の計画に含まれたその左岸の堤防建設も、植民地期からの工事の連続の上で進んだと言ってよいだろう⁵⁴⁾。

この第一期工事がどのように進められたのかは、資料がなく全くわからない。ただし、筆者が調べたところ一人だけ、この工事に参加したときの記憶を述懐している人物がいる。平壤で少年期を過ごし、戦後に国民的小説家となっていった五木寛之である。少年だった五木は敗戦の年の秋に、「父親にかわって、人民委員会から割当てられる労働供出の義務をはたすために」、「普通江という河の水防工事」に参加したという⁵⁵⁾。五木の記憶は正確で、帰りに貧民街を——西城里に違いない——通り抜けたことも記して

図5 「普通江改修工事図面」



(右側が『普通江』に付された図。スケッチに過ぎない図だが、位置関係は正しいと思われる。左に参考のために1938年の平壤の都市計画図の西側普通江周辺部分を谷川が配置した。各出典は注53参照)

いるが、この証言から、11月6日に起工した第一期工事には、引き揚げを待っていた日本人たちも動員されていたことがわかる。

しかし、生活基盤を失い、少年や老人・女性を中心としたいつ引き揚げていなくなるかわからないような日本人たちを使って、どれほどの成果が得られただろうか。平安南道の土木技術責任者がこの工事を「応急」と書いているように、あくまで最低限の工事を植民地期の延長で細々と進めていたと考えるのが妥当だろう。技術者も不足するなかでは、計画自体を大きく描き変えたり、枠組みを設定し直したりすることも難しかったはずで、その意味でこの工事は解放後も植民地期からの強い連続性の下で、惰性的に進められていたと見るべきだろう。

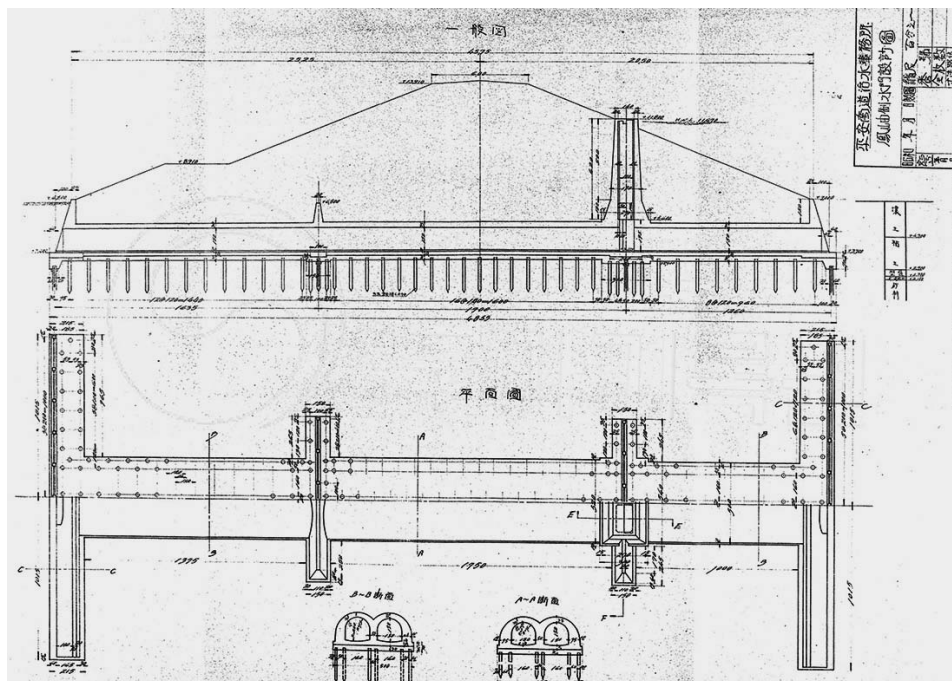
3.2 第二期工事

そして1946年5月、金日成らの号令一下、普通江改修の第二期工事が始まった。こ

の工事は計画図において太点線で描かれているが（図5内右図参照）、5月21日の開始後に第一期工事と統合されたようだ⁵⁶⁾。工事の中心は普通江と西浦川の合流地点周辺であったと考えられ、このことは1990年に出版された北朝鮮側の資料に付された鳥瞰図とも符合する⁵⁷⁾。なかでも工事において特に重要だったのは、普通江の旧河道を締め切って水路の方に水を導く南橋堤防と呼ばれる巨大な堤防で、他の堤防の高さが5mほどだったのに対して、この堤防は10mもあった⁵⁸⁾。普通江と西浦川の水を受け止めて、それを鳳岫里の丘側に設けた新水路に導くためには規模の大きな堤防の建設が必要だったのだ。こうして建設された一連の堤防が「愛国堤防」と呼ばれるようになっていったようだ。

こちらの工事内容に関しても詳細は前稿に譲るが、本稿の執筆過程で気づいたことが一点ある。それは先述の南橋堤防も、実のところ日本植民地期に一定程度建設が進んでいた可能性があるのではないかと、ということだ。というのも、1941年12月に平壤治水事務所が「堤内旧普通江ノ内水ノ調節ヲ計ル」目的で、「鳳岫制水門」の建設を民間請負業者と契約した記録があるからだ。このときの設計図によれば（図6⁵⁹⁾）、水門は堤

図6 「鳳岫制水門工事断面図」(1941年)



(堤防断面と水門の関係がよくわかる。出典は注59参照)

防に設置されることになっており、その天端は6m、水底からの高さは10m程度あった。この水門は堤防（図内の山形のシルエットが堤防断面を示す）と一体化していたと見られ、南橋堤防の建設が植民地期に多少なりとも進んでいた可能性を資料は示唆している。さらに、先述のように鉄道操車場の新設によって普通江支流の西浦川付替工事が戦時下において進められていたことも合わせると、解放後の普通江改修工事に対する認識を我々はさらに修正する必要があるのかもしれない。つまりそれは、日本が残した3割の工事を一気に進める大工事ではあったが、そのうちの重要部分の工事もある程度植民地期に手が付けられていたのではないだろうか。

この第二期工事は、途中で組織改編や計画修正などを行うとともに、共産党が現場を引き締めながら工期を短縮し、55日間で終わった。こうして工事を通じて延長5km、42万m³の土量を使った堤防が建設され⁶⁰、新しい水路がそこに誕生した。朝鮮人たちが主となって、普通江を付け替えることに成功したのである。かかった費用などは記されていない。

3.3 普通江改修工事のその後

以上のように普通江改修工事の①新水路建設の主要部分は1946年7月に終わったが、②旧河道の運河化工事は未着手のままであった。それではこの工事はどのように進められたのだろうか。

後年の北朝鮮の建築史書によれば、普通江改修工事の後、それに触発されて全国でいくつもの工事が起こるとともに、工事の「成果を強固にし、それを拡げるために」平壤運河工事や、大同江堤防工事、戊辰川（東平壤を流れる大同江の支流）堤防工事などが始まったという。この平壤運河工事が、普通江の②旧河道を利用した運河化工事であり、その長さは普通江と大同江の合流地点から「当時の西平壤工場地帯を通過して、西平壤操車場まで」全長7.3kmにわたっていた⁶¹。

1940年代後半に始まったこの運河建設の目的は、西平壤工場地区の工業原料と生産製品、野菜その他を船で運ぶとともに、市内の排水の円滑化に貢献することだったとされ、60トン級の船の通過も可能となるように計画されていたという。工事は1948年5月末には「70%」が完成したらしい⁶²。しかしながら、本当にそこまで完成していたのかどうかは疑問が残る。というのも、先に掲げた1950年の米軍の航空写真を見ると、運河は平南線のところまですら完成しておらず、普通江旧河道はほとんど未整備だったと判断できるからだ（図4参照）。

図7 「平壤特別市改建総合計画略図」(1951年5月)



(一部説明を谷川が加筆。出典は注 64 参照)

さて、朝鮮戦争が始まって1年近くたった1951年5月、爆撃を受けて焼け野原になった平壤において「平壤特別市改建総合計画略図」が発表された⁶³⁾。これは北朝鮮建国後、最初に発表された平壤の都市計画であるが、このなかで旧河道は運河化する形で描かれている(図7⁶⁴⁾)。②普通江の旧河道の運河化は、朝鮮戦争後も揺らぐことなく既定の計画として継承されていったと言えよう。現在、航空写真で見ても分かるように、概ね植民地期の計画と同じ形で普通江の運河は完成している。

3.4 普通江沿岸の工場地帯形成と「土城廊」のその後

ここで、前章で考察した二つの地域——すなわち、植民地期において「平壤府堂上里工業用地造成工事」がなされた「堂上里工業地域」と、土地区画整理事業がなされた西城里地域のその後を概観しておきたい。

前者は、運河を用いた中小工場誘致を強く志向した計画であり、それは解放後も継承されたようだ。北朝鮮の史書には大規模な工場以外についての情報が全くないので、具体的な考察が難しいが、彼らは少なくとも日本植民地期の工場の多くは壊さずに継承したし、場合によっては拡充して使っていた⁶⁵⁾。また、上述の1951年の都市計画においても、普通江下流の「堂上里工業地域」一帯は産業地域に設定されていたので、基本的な地域の性格は変わらなかったと考えられる⁶⁶⁾。しかも、今日の運河の構造を丁寧に見ると、実は日本植民地期の計画と同じ場所に運河が建設されているだけでなく、日本が埋め立ててしまう予定だった普通江旧河道の蛇行部分をそのまま水辺として利用したことも見えてくる。解放後はもちろん、1950年頃まで残されてしまっていた普通江の蛇行部分を、むしろ戦後復興を通じて積極的に親水空間として利用したのだろう。さらに、「堂上里工業地域」の中心にある運河から奥へと入っていく支線的な小運河も、植民地期の計画通り竣工して現在でも使われていることが確認できる。2024年の現在においても、航空写真を見るところの地域には中小規模の工場が明らかに多く分布しており、植民地期の「堂上里工業地域」の計画の基本は変わらずに、中小工場が並び立つ工場地域となったと言えよう⁶⁷⁾。蛇行部分の利用などは、日本植民地期の計画をさらに彼らが手を入れたことを物語るもので、少なくとも継承の後に、それをさらに発展ないし修正しようとした痕跡があることは留意しておきたい。

次に、旧西城里の方に目を移すと、1950年の航空写真に写っていた区画整理された街区やそこを埋める都市型韓屋、および土城廊の土幕群は、現在完全に消えてしまっている⁶⁸⁾。植民地期の都市空間特性は全く消去されたと見てよいが、それは次に見るように朝鮮戦争後に普通江沿岸が新たに親水公園としての機能を獲得していったことが最初の契機になったと考えられる。

まず、先に述べた1951年の「平壤特別市改建総合計画略図」の段階で、旧西城里付近の普通江岸は緑化事業をとまなう労働者たちの「文化休息公園」とすることが企図されていた⁶⁹⁾。そして1958年10月からは実際に公園整備が始まり、運河のさらに先の南橋堤防の方に至る約10kmの区間に、いくつもの橋および亭が設けられ、大小の湖の造成や植樹が進んだ。そして1970年に、普通門から平川埠頭へ至る京義線の跡地に沿っ

て千里馬通りが建設されると、付近はさらに大きく変貌を遂げた。特に千里馬通りと運河に挟まれた旧西城里地域は、大通りと水辺の緑地という二つの個性が掛け算され、ゆったりと敷地の余裕をもった大規模公共建築群が並ぶこととなった。人民文化宮殿や平壤体育館、アイスリンクなど、1970年代に金日成の肝いりで建設・竣工していった記念碑的建築群である。旧西城里の街並みは運河に沿って展開する親水緑地公園の特性を活かしながら、公共空間となっていったのである。経済合理性の観点で普通江開発を考えていた植民地期の計画とはかなり異なる形となったと言えよう。

ちなみに、旧西城里の対岸地域である大馳嶺地域に視野を広げると、ここも普通江沿いに公園が造られ、同時にモデル住区としてのアパート団地開発が1950年代末から進んだ⁷⁰⁾。日本植民地期において大馳嶺里は、普通江周辺のなかでもあまり開発されていなかった地域であり、1950年代に新しく朝鮮人たちの手で計画内容が与えられたと言える。そしてその地の目抜き通りである烽火通りが整備されると、その両側にさらにアパート団地が計画され、同時に運河沿いにあった鉄工所や化学工場などは撤去・移設されていった⁷¹⁾。つまり、植民地期に十分な計画がなされていなかった運河上流の地域については、朝鮮戦争後の復興過程で新たな意味付けがなされていったと考えられる。

3.5 小括

1946年5月の普通江改修工事は、植民地期に進められていた①新水路建設工事の計画が実践されたものであった。工事規模や位置、それによって出来上がっていった水路の物理的な空間に、元の計画との大きな違いは見られない。また、本稿の考察で解放後に朝鮮人たちが取り組んだと考えられていた①の工事のなかでも重要部分については解放前にすでに工事が進んでいた可能性も出て来た。この意味で、金日成らが主導して進めた普通江改修工事は、物理空間的には植民地期の工事と強い連続性の下にあったと言ってよいだろう。

②運河化工事の方は、①新水路による流路変更工事の完成後に持ち越され、朝鮮戦争後に本格化した。具体的な歴史資料がないために推測の域を出ないが、少なくとも旧河道の下流部である「堂上里工業地域」に関しては、日本植民地期の計画や空間特性を引き継いでいたと考えられる。一方それより上流の旧西城里やその対岸の大馳嶺地域の運河沿いについては、労働者を中心とした都市民たちの文化休息公園となることが計画された。1950年代の朝鮮戦争の復興に際しては、その計画は緑豊かな公共空間やモデル住区といった新しい特性や意味を持つ場所となって実現していった。②運河化工事にお

いては、植民地期の計画の骨子を基本としながらも、朝鮮戦争後になるとその上に北朝鮮の計画者らが新しい機能や意味を付与していったのであった。

4 結論——連続と断絶のデザイン

4.1 普通江改修工事の論点整理

ここまで日本植民地期に始まった普通江改修工事の建設史を解放後に至るまで概観してきた。本稿の主な問いは、1945年の解放後に登場する金日成ら新しい指導者たちが、普通江改修工事をどのように継承し、そしてそれを状況に合わせていかに改変したのかということであった。この問いの答えに至る前提として、以下の四点を整理・解明してきた。

一点目は、植民地期における普通江改修工事の進展具合である。そもそも、普通江の改修は、都市防水と経済開発という二つの目的を掛け合わせて工業化を進めるという大きな方針の下にあった。そしてそのために①新水路建設、②運河化工事、③遊水池兼船溜まりの建設という三つの工事に分節化して工事を進めてきたわけだ。このうち、③遊水池兼船溜まりが1937年に竣工したことや、①新水路建設が7割ほどしか完成しなかったことは、前稿で示した通りである。それに続く本稿においては、①新水路建設の工事の頓挫によって②運河化工事が進まず、結果としてかなりの程度残されてしまっていたことや、あるいはそれらを含む細かな諸工事の相互関係のなかで①と②の工事が進んでいたことを示した。

二点目は、②運河化工事とともに「堂上里工業地域」および西城里という運河沿いの二つの地域について、一步踏み込んだ考察を行った点である。前者の「堂上里工業地域」は、運河の下流部における工業地域計画であった。それは運河や水路を最大限利用した手厚い工業用地造成事業であり、平壤府は前のめりになってこの開発を進めたが、先述のように①新水路建設が思うように進まずに頓挫し、敗戦を迎えていた。一方で後者の西城里は、同じく建設予定の運河沿いにあり、堂上里の上流部にあった地域だ。考察を通じて、1930年代の工業化のなかで西城里の人口が爆発的に増加していたことや、そこに平壤最大の貧民街である土城廊が形成されていたことが明らかとなった。いわば西城里は、都市工業化のひずみとして生じた貧しい労働者たちの急増を、インフォーマルに受け入れる地域だったと言えよう。そしてだからこそ、その地を秩序化していくためにも平壤府はそこで土地区画整理事業を展開したと考えられる。これらを踏まえると

普通江改修工事は、平壤西側の広い範囲の工業化を担う基幹事業として、大戦末期にかなり本格的に遂行されていたと見ることができよう。工事は、工業開発に向けた平壤府の高い期待と、蓄積されてきた社会的ひずみの只中で、進められたのであった。

三点目は、1945年8月の解放以後における普通江改修工事の植民地期との物理的な連続性についてである。前稿で筆者が論じたように、1945年8月の段階での①新水路の完成度は、平南線の線路より下流を中心に7割程度だった。しかしながら今回の考察で、それより上流側の南橋堤防のような重要な堤防においても、植民地期に工事が始まっていた可能性が出て来た。こうした普通江の付け替えのための基幹施設が植民地期において一定程度進んでいたとすれば、解放後においてはそれを無駄にしないためにも、1946年の梅雨よりも前に工事を完成せねばならなかっただろう。このように考えていくと、新しい指導者たちが工事を継承したというよりも、それは否応なく進めねばならないものであり、むしろ彼らを拘束したとも言えるかもしれない。少なくとも普通江改修工事には、そのままの形で動き続けようとする物理的かつ強い歴史の慣性のような力が働いていたのである。

四点目のポイントは、1946年の金日成らが指導した①新水路の工事のあと、②の運河化工事がいかに完成していったのかということ、ラフスケッチながら運河沿岸の地域景観の変化とともに示した点である。例えば、植民地期において始まっていた「堂上里工業地域」は、当初の計画と同じ用途かつ似通った地域空間構造で完成していた。しかし、朝鮮戦争からの復興に際して本格的に建設が始まった運河上流部の西城里や大馳嶺里の地域では、植民地期の性格が完全に消えてしまっていた。基層にある運河の建設やその構造は植民地期の計画を下敷きとしていたが、その沿岸に生じた地域計画の差異は、おそらくこうした建設時期の違いに由来している。つまり②運河化工事に付随するその沿岸部の特性は、下流部であればあるほど植民地期に工事が始まっており、その計画的な連続性が1945年以後も残された。しかし上流部は北朝鮮という国家の建設が始まり、さらには朝鮮戦争を通じて平壤が焦土となったあとに工事が具体化したため、新たに主体的改変や刷新が加えられていった、というわけである。

4.2 普通江改修工事とは何だったのか——連続と断絶のデザイン

以上の整理を経て見えてくることは、1946年5月に金日成らの指導の下でなされた①新水路建設による普通江の付替工事が、物理空間としては日本植民地期の強い連続性の下にあったことだ。それは土木工事という巨大事業が否応なく持つ歴史の慣性といっ

てもよいかもしれない。しかし、だからといってそれを継承した朝鮮人たちに、その工事を造り替えようとする創意やデザインの意志はなかったとするのは誤りだ。前稿で筆者が述べたように、金日成を始めとする新しい指導者たちは、工事のなかに様々な工夫や仕掛けを持ち込み、それによって工事自体を自分たちの建国事業にしていた。本稿もそうした点を考察してきたが、最後に二点ほど、別角度からの資料分析を若干加え、それを踏まえた見通しを述べて結論としたい。

一点目は、①新水路の建設工事を行う上で都市防水という基本的な大義名分が、指導者たちの権威の確認や肯定、あるいはそこでの動員という制度を導入する上で、極めて使いやすかったと思われることだ。例えばそれは、『普通江』に掲載されている、1946年5月に都市民を動員する際に出された檄文のなかの一節が物語っている。

(谷川注：毎年氾濫する普通江によって) 私たちは辛酸な水難の経験を重ねてきた。一日も早くこの普通江改修工事を完遂して平壤を守ることは、市民の生命と資産を安全にすることになるだけでなく、建国事業と民主主義を防衛することになるだろう⁷²⁾。

そもそも普通江改修工事を構成した工事のうち、②の運河化による都市工業化に比べれば、①新水路を建設し、普通江を付け替えて都市の防水を達成するというメッセージはわかりやすい。なぜなら河川の付け替えは、洪水から都市民の命を守るという単純明快な目的だからだ。そしてそれはもちろんこの檄文でわかるように、建国事業や民主主義と直結可能な公共的な大義名分であった。

こうした点は、普通江改修工事宣伝部が作成し、「普通江改修工事の宣伝要綱」と題された別の文書(こちらも同じく『普通江』に収録されている)でさらに戦略的に吐露されている。文書名から推測するに、おそらくこれは平壤の都市民はもちろん、関係する諸機関や組織、そしてさらに外部に向けたプロパガンダのためのガイドラインと考えられる。このなかでは、普通江による西平壤一帯の洪水リスクは「平壤発展の癌」と捉えられており、早くそれを「摘出」とするとともに、その作業においては人々の「愛国心に訴えて自発的に」工事に参加させることが肝要だとされていた。そして「愛国の情熱を労働実践で表現し、(中略)個人的利害関係を超越することによって私たちは国民的矜持を持つべき」と説いている⁷³⁾。

また、別のところでは、日本が植民地期に朝鮮の子供や女性まで使って建設しようと

した工事を、自分たち自身の力でできない場合は民族的羞恥心に繋がると書かれていた——逆に完成できれば民族的誇りとなるという意味であろう。そしてそのための宣伝戦略として「市民の憤りの発心を喚起すること」が期待されていた⁷⁴⁾。

つまり工事の目的の拡大解釈により、普通江改修工事の①新水路建設は、建国事業としての位置づけをたやすく獲得できたわけだ。これは言い換えれば、工事を単に連続させるだけであっても、その情報発信や意味内容を変化させれば、大きなメリットが生まれうるということだろう。新しい朝鮮人の指導者たちは、建設作業自体の具体的連続と、建設の主体や意味の抽象的断絶をうまく関係づけて編集し、統治権力の権威や愛国心の向上、あるいは動員体制の整備に工事を利用しようとしたのである。

二点目は、河川の付替工事が持つ土木工学上の特質である。そもそも、市街地を取り巻く堤防や水門、細長い運河を造るといった河川改修工事のようないわば「地味」な建設作業のなかで、建国の象徴となりえるような記念碑的造形や具体的労働はそう多くない。解放後の朝鮮には①の新水路建設工事と②の運河工事が残されていた。このうち②の運河化工事は、1950年代後半から本格化した⁷⁵⁾が、それが公園や公共空間になっていく過程は①新水路建設ほど象徴的なものではなく、長い時間をかけた段階的な変化でしかなかった。一方で、①新水路建設による河川の付け替えには、大雨の中で刻々と変化する水位と戦いながら堤防を築き、完工後は新しい場所に別の大きな川（水路）の流れが現れるという動的な景観変化がある。したがって①暴れ川を征服して新しい川（水路）を造るという行為は、②止まった川を運河化するような工事よりも、「建国意欲と愛国心」を賭けるにふさわしい壮大な行為だったわけだ。北朝鮮の歴史書が、普通江改修工事を「偉大な大自然改造」の「第一歩」と述べていることは⁷⁵⁾、そうした景観と土地利用の動的な変化が呼び起こす象徴性を重視しているからに違いない。

つまり、解放後の新しい指導者たちは、普通江改修工事のなかでも、①新水路建設による河川の付替工事にそうした変化を可視化させるような象徴性や記念碑性を感じたからこそ、それを最初の国民的な土木工事に「選んだ」とも考えることができよう（もちろんそこにはソ連の関与があったことだろう）。しかも平壤の場合は、先に述べたように「北朝鮮の民主主義建設の中心地を守る」という人々の生死に直結するわかりやすくロマンチックなロジックで、工事作業を政治的かつ肯定的に意義付けすることもできた。結局のところ、工事自体は日本植民地政府が残したものではあったが、同時にそれは解放後の新しい指導者らによって選り直され、位置付けなおされたものでもあったのである。

このように考えていくと、第2章で見たように、日本は工事自体にこうしたモニユメンタリティを感じ取ってこなかったと見ることができる。それはあくまで経済合理主義に後押しされて進めた都市の防御と安全性・利便性への追求であったし、工事自体が持つ記念碑性やそのプロセス自体に含まれる様々な可能性には概ね無関心だった。そのため植民地期の普通江改修工事においては②運河化工事こそが重要であり、①新水路はあくまで平壤西部の工業化のための基礎的手段でしかなかった。そして①の工事を7割しか完成させることができなかったため、②も頓挫することとなった。

しかし、新しい朝鮮の指導者たちは違った。金日成らは敗戦／解放に横たわる歴史の連続と断絶を、都合よく編集することに成功し、その実利以上の大きな政治的利益を得たのである。彼らは植民地期からの物理空間の具体的連続を肯定しつつ、解放にとまなう抽象的断絶を工事に活かした。言い換えれば、できあがるモノ自体よりもそれを誰がどのように造るのかということが、あるいは経済合理主義からはじき出される利潤よりも、一人一人が歴史的で存在論的な意味や責任を感じるものが、時に大きな現実変成力を生むことを垣間見せたわけだ。普通江改修工事は、こうした視点で見たときに、その本質的な意義を捉えることができるのである。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 17KK0024, 20H01330 の研究助成による成果である。

注

- 1) 竹丸喜一「終戦直後の治安対策」「思い出の平壤」刊行委員会編『思い出の平壤』全平壤楽浪会、1977年、p.328。
- 2) 竹丸喜一は、1942年7月1日現在、平壤・船橋里署の署長を務め、同年11月1日には平壤警察署長となっていた。戦時下の平壤の治安事情には精通していたと思われる（朝鮮総督府編『朝鮮総督府及所属官署職員録』朝鮮総督府、1943年、p.441, p.575）。
- 3) 20世紀初頭ではせいぜい水死体や洪水の記事でとりあげられる程度で、その河岸は地元の人々が砂風呂などに入りに来るような場所だった。「大平壤」などといった威勢の良い言葉とともに普通江一帯が語られ始めるのは1920年代後半である（「夏刈沙蒸」『毎日申報』毎日申報社、1915年8月13日、3面）。
- 4) 普通江改修工事完遂慶祝準備委員会編『普通江 改修工事特輯』普通江改修工事完遂慶祝準備委員会、1946年（以下、『普通江』と略記）。
- 5) 谷川竜一「1946年平壤・普通江改修工事の再検討-「突撃」という脱植民地化の技法-」『社会科学』第52巻4号、同志社大学人文科学研究所、2023年。

- 6) 김태운 『근현대 평양의 도시계획과 공간 변화 연구 (1937~1960)』 서울시립대학교 국사학과 문학박사학위논문, 2022년 (Kim, Teun 『近現代平壤の都市計画と空間変化研究 (1937~1960)』 ソウル市立大学校国史学科文学博士学位論文, 2022年). 김경수 「경애하는 수령 김일성동지께서 발기하시고 조직지도하신 역사적인 보통강개수공사 (1)」 『역사과학』 90호, 과학백과사전출판사, 1979년, pp.8~13 (Kim, Gyeon-su 「敬愛する首領 金日成同志が發起され, 組織指導された歴史的な普通江改修工事 (1)」 『歴史科学』 90号, 科学百科事典出版社, 1979年, pp.8~13). 김경수 「경애하는 수령 김일성동지께서 발기하시고 조직지도하신 역사적인 보통강개수공사 (2)」 『역사과학』 91호, 과학백과사전출판사, 1979년, pp.9~15 (Kim, Gyeon-su 「敬愛する首領 金日成同志が發起され, 組織指導された歴史的な普通江改修工事 (2)」 『歴史科学』 91号, 科学百科事典出版社, 1979年, pp.9~15).
- 7) 広瀬貞三 「1934年朝鮮南部の洪水と復旧活動: 洛東江を中心に」 九州大学朝鮮学研究会編 『年報朝鮮学』 九州大学朝鮮学研究会, 2018年, pp.1~26. 広瀬氏は 2022年秋に逝去された。
- 8) 朝鮮總督府内務局土木局 『平壤都市計畫書』 朝鮮總督府, 1930年, p.70.
- 9) もともとこの平壤近郊の炭田は大韓帝国の帝室の所有であり, 1906年頃に日本の陸海軍がそれに目を付けて収容を試みたのが始まりで, その後農商工部などを経て, 日本海軍の軍用炭として用いられていたという。そのためしばらくの間, 日本海軍によって独占されるとともに日本への移出も禁止されていたが, 徐々に規制緩和がなされ, 1924年になるとついには朝鮮の外にも移出することが可能になった (「海軍省 韓国平壤炭硯収容に関する件」 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C03022853100, 密大日記 明治39年自8月至12月 (防衛省防衛研究所), 朝無社社友会回顧録編集委員会編 『朝鮮無煙炭株式会社回顧録: 汗と油・血と涙の記録』 朝無社社友会事務局, 1978年, p.13)。
- 10) 朝鮮總督府 『朝鮮河川調査書』 朝鮮總督府, 1929年, p.531。
- 11) 前掲 『朝鮮河川調査書』, p.531。
- 12) 朝鮮總督府 『第二次, 三次 朝鮮窮民救済治水工事年報』 昭和9, 10, 11年度, 朝鮮總督府内務局, 1940年, p.133。
- 13) 前掲 『第二次, 三次 朝鮮窮民救済治水工事年報』, p.62。
- 14) 前掲 『第二次, 三次 朝鮮窮民救済治水工事年報』, p.61, p.73。
- 15) 「之れが完成は先づ普通江改修を俟たざるべからざる事情にあり (・・・)」 (岩下正 「平壤府昭和17年度土木事業実施中の主なるもの」 『区画整理』 7月号, 土地区画整理研究会, 1942年, p.49)。
- 16) 1938年7月, 1939年9月, 1940年8月と毎年洪水を起こしている (谷川竜一, 前掲論文, p.8)。
- 17) 朝鮮總督府編 『朝鮮河川調査年報』 昭和14・15年度, 朝鮮總督府, 朝鮮總督府司政局, 1943年, p.2。また, これは後に277河川に広がったようだ (朝鮮總督府編 『朝鮮總督府施政年報』 昭和16年度, 朝鮮總督府, 1943年, p.359)。

- 18) こうした大河川と中小河川の関係については、戦後日本の土木工学者であるとともに著名な土木史家である高橋裕らが、1950年代に筑後川を事例として流域全体の管理の重要性を指摘した点と重なるものだ。
- 19) 前掲『朝鮮河川調査年報』昭和14・15年度, p.25。
- 20) ただし、「中小河川改修工事」の枠組み自体の設定については1936年7月の朝鮮南部の洪水の影響を蒙ったようだが、普通江改修工事に関しては、1936年7月18日の段階ですでに1938年度から実施すると報道されており、同年の洪水が引き金になったわけではないようだ（「普通江改修流域地帯変更決定乎」『毎日申報』毎日申報社, 1936年7月18日, 5面）。
- 21) ここが平安南道治水事務所を兼ねていたと思われる。普通江改修工事を担当したのは平壤土木出張所所長・福西正雄であった（福西正雄「私と縁が深い大同江」「想い出の平壤」刊行委員会編『想い出の平壤』全平壤楽浪会, 1977年, p.104）。
- 22) 『平壤市街地計画平面図』（1万5千分の1）1938年（図面の隅には1934年の人口が小さく付されていたが、描かれた空間情報は1937年ないし38年と考えられる。ここでは1938年とした。なお隅の情報は、地図をより大きく見ることができるようここではカットした）。
- 23) 筆者は前稿で「5km」西にずれたと記したが、それは誤記で西に「1.5km」が正しい（谷川竜一, 前掲論文, p.9）
- 24) 1936年7月18日の『毎日申報』の報道で、京義線の将来計画に配慮して、ルートが西に変更される可能性が高い旨の報道がされている（前掲「普通江改修流域地帯変更決定乎」）。また、平壤府土木課が監修して1937年9月に発行された平壤の地図では、平南線以北のルートが描かれていない（平壤府土木課監修『平壤附全図』平壤毎日新聞社, 1937年）。
- 25) 「公有水面埋立工事竣工ノ件」（1944年2月17日）（韓国国家記録院（CJA0016013））。
- 26) ただし、戦争の本格化するなかで予算確保が難しくなるとともに、改修工事よりも道庁の建設を優先させられるなどしたため、工事は延期を繰り返したようである（「昭和16年中小河川改修事業費資金ニ充ツル為大蔵省預金部資金融通ノ件」（1941年12月4日）（韓国国家記録院（CJA0003583）））。
- 27) 朝鮮総督 南次郎「中小河川改修工事費起債ノ件」（1941年8月14日）（韓国国家記録院（CJA0003576））。
- 28) 谷川竜一, 前掲論文。
- 29) 平壤市人民委員会布告（1946年5月17日）に、「過去倭政時代の普通江改修工事は約3割の工事未完成により」と記されている（『普通江』, p.38）。
- 30) 「平壤府第二市街地及工場地区用地造成費旧債償還費並ニ同事業費充当起債ノ件」（1943年3月1日）（韓国国家記録院（CJA0003708））。「平壤府堂上里工場地区造成事業実施計画ニ関スル件」（1941年9月4日）（韓国国家記録院（CJA0003622））。
- 31) 「平壤府第二市街地造成準備費起債要項中変更ノ件」（1941年3月3日）（韓国国家記録院（CJA0003622））。

- 院 (CJA0003557))。
- 32) 「明らかに本府の工業都市としての発展を示せり」(前掲『平壤都市計画書』, p.36)。
- 33) 前掲「平壤府第二市街地及工場地区用地造成費旧債償還費並ニ同事業費充当起債ノ件」。
- 34) 前掲「平壤府第二市街地及工場地区用地造成費旧債償還費並ニ同事業費充当起債ノ件」。
- 35) 前掲「平壤府第二市街地及工場地区用地造成費旧債償還費並ニ同事業費充当起債ノ件」。
- 36) 前掲「平壤府第二市街地及工場地区用地造成費旧債償還費並ニ同事業費充当起債ノ件」。
- 37) 前掲「平壤府第二市街地造成準備費起債要項中変更ノ件」。
- 38) (B040) 항공사진_195011001500040013, 韓国国土情報プラットフォーム。「平壤府市街地計画(第3区)西城土地区画整理実施計画認可申請」(1939年7月22日)(韓国国家記録院(CJA0015701))。朝鮮総督府『調査資料第24輯 生活状態調査(其四)平壤府』朝鮮総督府, 1932年。
- 39) 前掲「平壤府市街地計画(第3区)西城土地区画整理実施計画認可申請」。
- 40) 西城里は1932年に3800戸だったが, 1935年には5000戸を超え, 平壤で最大かつ最も「発展」した地域であった(「平壤府発展状態 西城里가最顯著 五千余戸에 二万三千의 人口」『毎日申報』毎日申報社, 1935年6月25日, 4面)。
- 41) 김태운(キム・テウン), 前掲書, p.44。なお, 堂上里の第一期工事では, 住居地や商業地の敷地も計画されており, 西城里だけに居住機能を担わせようとしていたわけではない。
- 42) 調査では, 都市社会の「下層」を構成する「日雇労働者, 小作貧農, 職工及職人, 小商人, 其他」といった「勤労者層」と, 最も「下層」を構成する「乞食浮浪者, 精神変質異常者, 傷痍者, 中毒者, 其他」といった「非勤労者」が, それぞれ細かく調べられており参考になる(平壤府『下層階級に於ける生活及思想状態調査』平壤府, 1933年)。
- 43) 作品冒頭では, 元三たちは踏切を渡って左に折れ, 屠殺場を通り抜けているが, 実際の地理空間においては踏切の手前で左に曲がらないと屠殺場に近づくことはできない。金史良は, 現実の土城廊を参考にしつつも, 一部空想を交えて舞台を設定したのではないだろうか(具珉「土城廊」『近代朝鮮文学日本語作品集: 1901~1938 創作篇 1』緑蔭書房, 2004年, p.335。なお, 具珉は金史良(本名・金時昌)の筆名)。
- 44) 土城廊の位置については, 近年ではイ・ドンミンなどが考察しているが, 大まかな位置同定に留まっている。なお『普通江』には, 土城廊や貧民について記載や説明は見られない。その理由は, 解放後の普通江改修工事が西城里から離れた鳳岫里周辺での①新水路の建設に集中したためと考えられる。1946年の普通江改修工事が土城廊に手を入れたものではなかった点は, 注意しておく必要がある(이동민「일제강점기 문학 작품의 도시 빈민가 재현 양상에 대한 연구-김사랑의 소설 토성랑을 중심으로-」『문화역사지리』제33권 제1호, 2021년, p.77(イ・ドンミン「日帝強占期文学作品における都市貧民街再現の様相についての研究 -金史良の小説「土城廊」を中心として」『文化歴史地理』第33巻第1号, 2021年, p.77))。
- 45) 前掲「土城廊」, p.358。

- 46) 実際に、1936年7月の新聞記事ではこの付近の土城廊が紹介されている。記事によれば、ここには480戸の土幕があり、1521人が住んでいたとある。金史良が最初に「土城廊」を書いたのは1936年10月なので、こうした記事からもインスピレーションを得たのではないか（『大平壤의裏面踏査記 普通江기슭에陣친 求乞客의一部落』『朝鮮中央日報』朝鮮中央日報社、1936年7月22日、7面）。
- 47) 例えば前掲の『平壤府』に付された写真には堂上里の貧民の住宅や土幕などが記録されている（前掲『平壤府』、1932年）。
- 48) 平原直「明治39年ごろの平壤」「想い出の平壤」刊行委員会編『想い出の平壤』全平壤楽浪会、1977年、pp.70～71）。
- 49) 解放後の北朝鮮では、土城廊は日本の植民地支配によって出来上がったと考えられているが、むしろ朝鮮王朝以前の封建社会において虐げられてきた人たちが城外に住んでいたところに、植民地支配下での工業化のひずみが重なって膨張したと見なす方がよいだろう。（『조선전사』23 민주건설사1, 과학백과사전출판사, 1981년, p.320（『朝鮮全史』23卷 民主建設史1, 科学百科事典出版社、1981年、p.320））。
- 50) 『普通江』、p.28。
- 51) 『普通江』、p.25。
- 52) 『普通江』、p.28。
- 53) 『普通江』、p.28。前掲『平壤市街地計画平面図』。
- 54) 「普通江支流西浦川付替ノ件」（1939年10月25日）（韓国国家記録院（CJA0015657））。
- 55) 五木寛之「私が哀号と呟くとき」『五木寛之エッセイ全集』第4巻 ゴキブリの歌、講談社、1979年、p.249。
- 56) 『普通江』には、「（谷川注：第一期工事は）今年六月末竣功予定であり、継続して全体工事を完了し・・・」とあり、おそらくこの全体工事が第二期工事を意味する包括的工事だったという風に読める（『普通江』、p.28）。
- 57) 谷川竜一、前掲論文、p.19。
- 58) 평양건설전사 편찬위원회『평양건설전사2』과학백과사전종합출판사, 1997년, p.23（平壤建設全史編纂委員会『平壤建設全史2』科学百科事典総合出版社、1997年、p.23）。
- 59) 「鳳岫制水門築造工事」（1941年12月24日）（韓国国家記録院（CJA0015826））。
- 60) 『普通江』、p.72。
- 61) 리화선『조선건축사2』과학백과사전종합출판사, 1989년, p.29（リ・ファソン『朝鮮建築史2』科学百科事典総合出版社、1989年、p.29）。
- 62) 리화선（リ・ファソン）前掲書、p.30。
- 63) 리화선（リ・ファソン）前掲書、p.88。
- 64) 조선건축가동맹중앙위원회편『조선건축』1993년2월호, 공업출판사, p.11（朝鮮建築家同盟中央委員会編『朝鮮建築』1993年2月号、工業出版社、p.11）。
- 65) 리화선（リ・ファソン）前掲書、p.68。

- 66) 리화선 (리·ファソン) 前掲書, p.88。
- 67) Google マップ (39.02425329501758, 125.71287051719229) 付近を参照。
- 68) Google マップ (39.02138555843728, 125.73181937990175) 付近を参照。
- 69) 리화선 (리·ファソン) 前掲書, p.89。
- 70) 리화선 (리·ファソン) 前掲書, pp.165~166。
- 71) 리화선 (리·ファソン) 前掲書, p.114。
- 72) 『普通江』, p.22。
- 73) 『普通江』, p.29。
- 74) 『普通江』, p.31。
- 75) 정인식 외 『조선지리지전서——로동당시대의 대자연개조』 교육도서출판사, 1990년, p.32 (チョン・インシクほか『朝鮮地理全書－労働党時代の大自然改造』教育図書出版社, 1990年, p.32)。

(第21期第9研究会による成果)